

ニッポン 2025

2050年は働けるままで働く「生涯現役」が常識となる。医療技術の進展により、健康で長生きする高齢者が増える。人工知能(AI)活用で、自分の能力が生かせる職場が摩擦なく見つか

「日本でも似た組織はできないから、年に一回機轉を立ち上げた。現在、退職後のシニアなど会員約150人が所属し、ベンチマーク企業へのノウハウを提供。『身体は衰えても、頭はまわっている。世の中に活躍するシニアをもっと増やしたい』



日本のシニアの労働意欲は高い

富山県米見市が誇る「水見アリア」。これに次ぐ新たな特産品として、トコブタのブランド育成に奔走するのが松井武女さん(62)だ。松井さんは三菱化成工業(理三菱ケミカル)の元技術職で、日本シニア起業支援機構の代表理事を務める。多様な経験を生かし、養殖の技術確立や輸出支援を主催する。「シニアが持つ知見や経験をシニアに生かさないのは機会損失だ」と松井さんは考

える。米国には第一線を退いた経営者や企業OBらが起業家を支える組織「スコア」がある。日本でも似た組織はできないから、年に一回機轉を立ち上げた。現在、退職後のシニアなど会員約150人が所属し、ベンチマーク企業へのノウハウを提供。『身体は衰えても、頭はまわっている。世の中に活躍するシニアをもっと増やしたい』

厚生労働省・人口問題研究所の推計では、働き盛り(25～59歳)である20～30歳の人口は足元で5400万人。2050年には4100万人と23%減少する。多くの企業が定年と定める60歳以上の人口は足元の4400万人から30年に4500万人と増加する。30年には働き盛りと「定年後」の人口が逆転する。人手不足が経済成長の深刻な制約になる。他方、シニアがリタイアせず、経験を年かして積極的に働けば経済の制約にはならない。60歳以上の人口で働く人は26%。経済協力開発機構(O

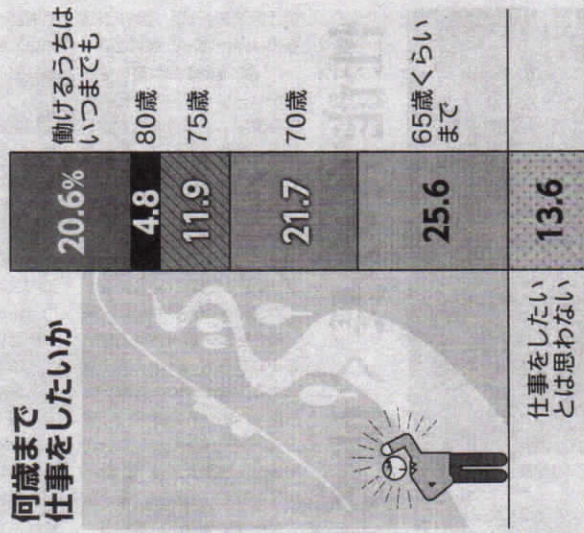
働きたいシニア 技術進展が背中押す

ECI)によると米国(19%)やドイツ(9%)より高く、主要7カ国で最も高齢者が働く国だ。日本はすでにシニア雇用で世界の先頭ランナーといえる。働き手の年齢層が広がれば、働き方も多様になる。2050年のシニアはスマートフォンやパソコンなどのIT(情報技術)機器をまよときから使いこなしてきた。『身体を衰えを技術で補強することと、個人の状況に応じた柔軟な働き方が可能になると、三菱総合研究所の地沼義昭氏は指摘する。例えば足腰が弱って長距離移動が難しくても、メタバースなどの仮想空間で仕事ができる。空いた時間にスマホで仕事を探そうとスゴットワークも必要時に必要なだけ働きたいというニーズを持つ高齢者と相性が良い。AIが「仕事探しのエージェント」となり、個人のスキルに応じた仕事を紹介するなどのマッチングも可能になる。培ってきた経験を社会に生かすことで、新たな成長が

生まれる機会となる。働くシニアの位置づけは変える必要がある。『今までのシニア雇用は補助雇用だった。今後は能力・価値発掘型に変わっていくべきだ』とパーソル総合研究所の小林哲児氏は指摘する。現状では前線になった社員を前線まで一律処遇する企業も多い。産働でききこころを余らせたり、若手のやる気をそいだりする副作用を生んでいるという。『定勤による画一的な処遇を見直し、役割や評価で差をつける仕組み作りを進める必要がある』と

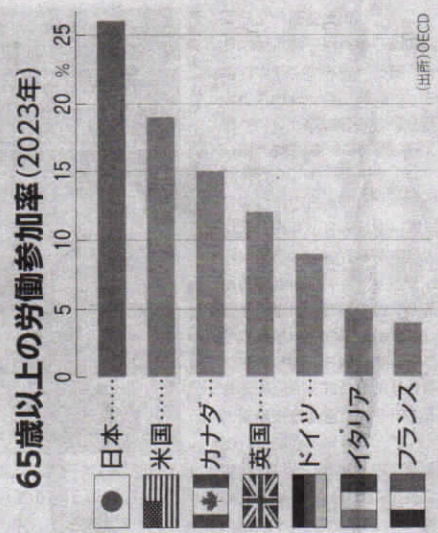
内閣府によると、60歳以上の6割が70歳まで大きくは働かずとも働きたい意向を持つ。うち2割は「働けるうちはいつまでも働きたい」と考えている。三菱総研の試算では、働きたいシニアが増えることで2050年の総人口は現状よりも約5.3兆円の押し上げ効果が見込めるとしている。2050年は若者が高齢者を支えるのではなく、高齢者を支える社会になる。

100年現役社会へ動き出す

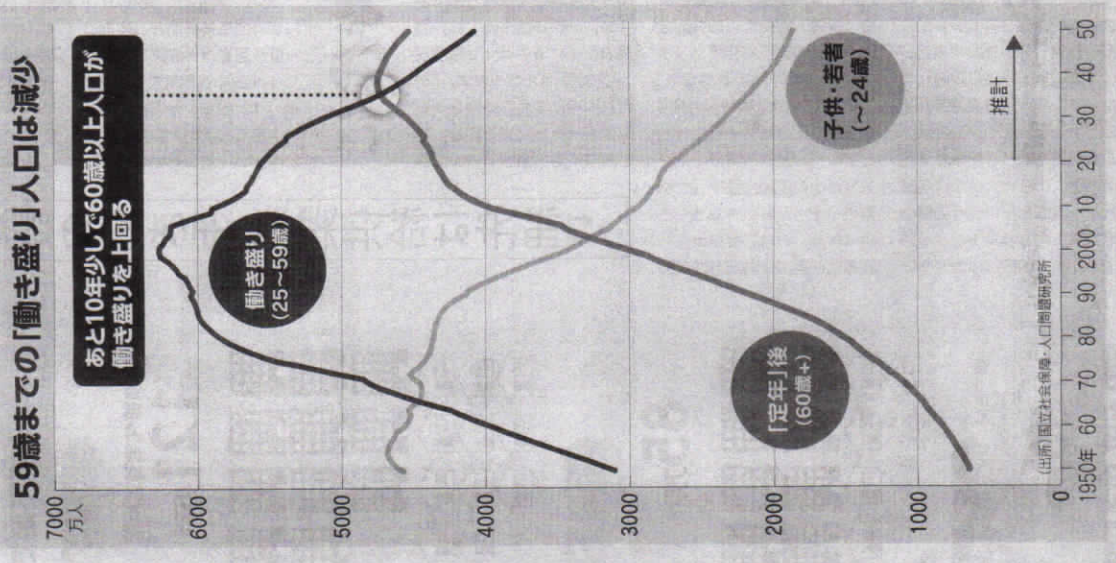


不明・無回答 1.9%

(注)全国60歳以上を対象に2020年に調査。内閣府資料から作成。四捨五入の關係で合計は100にならない。



(出所)OECD



59歳までの「働き盛り」人口は減少
あと10年少しで60歳以上人口が働き盛りを上回る

働き盛り (25～59歳)

「定年」後 (60歳+)

子供・若者 (~24歳)

推計

(出所)国立社会保障・人口問題研究所

経験生かし起業

医療技術の進歩で